藩翰譜續編 巻之十上

雜書部 第三三四號 五函 共二五冊

和書門類 四二五六六號 一三三函 一四架 三六冊

内閣文庫 和書類 四二五六六號 三三冊 一五五函 八架

内閣文庫
番號 和 42566
冊數 36 (33)
函號 155 58

藩翰譜續編卷之十上

稲葉　右京亮景通

脇坂　中務少輔安政

小出　備前守英安
　附　大隅守有重
　　　信濃守英知

加藤　遠江守泰恒
　　　織部正直泰

谷　出羽守衛廣

木下　淡路守利貞
　　　右衛門太夫俊長

相良　遠江守頼喬

秋月 佐渡守種信

宗 對馬守義眞

松浦 肥前守鎮信

大膳昌

五島 淡路守盛勝

久留嶋 信濃守通清

稲葉

藤原信通

女子 花山院内大臣定誠公室

景通 右京

右京亮従五位下承応三年十二月廿八日叙任元禄七年閏五月卒年五十六法名本光院一座

宗眞

知通 市正 初通周

実能登守信通三男能登守従五位下貞享元年十二月廿五日叙任宝永三年四月十五日卒四十五歳法名本霊院一嶽

宗泰

女子 織田越前守信久室

某 右エ門 早世

通周 市正

通行 監物

杲 早世

越智恒通 彦六
飛騨守従五位下 宝永元年十二月十一日叙任 同三年六月十一日改伊与守 同六年五月従越智氏 享保五年六月廿日卒 三十二 法名本輪院一峯宗厳

通大 荘右衛門
稲葉内蔵丞通長養子

董通 中務
能登守従五位下 享保五年十二月十八日叙任 同廿年五月改刑部少輔 同年九月改伊勢守 元文二年正月十七日卒 三十二歳 法名本明院一源宗徳

女子 松平修理亮武寿妻

徳綱 修理
朽木縫部助綱養子

通古 監物

恭通 百治郎 民部 初治通
右京亮従五位下 延享四年十二月十九日叙任 宝暦八年有改能登守 明和五年七月二日卒 三十九歳 法名本源院一水宗滴

女子 一柳土佐守末栄室

長棟 ニナル 甚之丞 民部
市橋下総守直暎養子

通房 主税

信昉 三左衛門
山高右衛門信蔵養子

女子 勧修寺権大納言顕道卿室

女子 伊東左京亮祐甫室
二人早世

候通 生駒彦四郎

雍通 虎次郎

女子 許嫁相良政太郎長猷卒

弘通 亀太郎 初剛通
従五位下能登守 明和七年十二月十六日叙任

通辰 松次郎

一 稲葉

右京亮藤原景通ハ伊予守越智之前編ニ載たる降子の譜ニ示する右京亮通ハ七世の祖備中守通貞あり而て後号す阿波守右京亮通ハ恒通ハ時よ且て右順ニ後ニして越智称せといふ能登守信通の嫡男也正保
三年襲封て凡其年より萬治三年十二月廿八日前編ニ二年と記也
し八謁叙爵して延宝元年の八月家を継豊後国臼杵の城五万石余
元禄七年の夏五十六歳にして卒を去りし遺八歳十四正
知通初め通周を養て家を継せ知通寛文元年襲封て凡其年
貞享元年の冬従五位下ニ叙して能登守に任宝永
三年の夏卒す歳五十五なり彦六恒通元禄十二
年七月廿八日襲封仍て初謁し宝永元年冬叙爵して
若狭守と称す能登守同六年十月十日家を継ぐ享保
五年の夏三十一歳にて卒去嫡男中務董通同五年
十二月襲て謁見して八月家を継て後従五位下
能登守に任後刑部少輔又伊織元文二年春三十二歳にて
失ぬ民部泰通父又従兄延享四年冬叙爵して
右京亮とす後能登守又明和五年の七月卒去三十九歳

元年寛文九年十一月廿五日初而御目見 [illegible]七年[illegible]従五位下
叙淡路守任時十七

脇坂

藤原安元

安経　虎松
実中務少輔安治五男 佐渡守従五位下 寛永九年四月四日卒 法名崇禅院機叟紹用

安利　左兵衛
実堀田勘左衛門正吉二男 寛永十三年二月四日卒

安政　甚太郎 初安吉
実堀田加賀守正盛二男 中務少輔従五位下 [illegible]四年十二月廿八日叙任 貞享元年十二月廿五日致仕 号[illegible]

安村　甚太郎
東市正従五位下 寛文十年十二月廿八日叙任 延宝六年九月十三日依病隠居 天和二年九月十九日配流若狭国 宝永三年九月廿五日卒 年六十一 法名霊台院智淵道勝

某　傳次郎　早世

安照　甚之助　主殿
淡路守従五位下 延宝六年十二月廿八日叙任 宝永六年十二月十五日致仕 号[illegible] 享保七壬寅九月十九日卒 六十五 法名[illegible]

女子
安照養女

元禄七年四月廿日卒 六十二歳 法名東陽院 九機如水

女子 実脇坂甚九郎安信女 池田三之助長紀妻

女子 実安村女 京極主膳正高之室 离別

女子

安清 主殿
伊勢守 従五位下 元禄十二年十二月十八日叙任 宝永六

女子二人
有馬左兵衛佐永紀室
加藤遠江守泰常室

玄要院 一機如水

安貞 宮内
正徳五年二月十三日卒

女子 早世

某 豊之助 早世

安興 豊之助
中務少輔 従五位下 享保十六年十二月廿三日叙任 同十八年六月廿八日改淡路守 安永二

安弘 主殿
中務少輔 従五位下 宝暦四年十二月十八日叙任 同七年七月十八日卒 二十歳

年十二月十六日改淡路守 享保七年十月九日卒 三十八 法名寛恭院泰嶽了山

某 安次郎 早世

通用 織部
久留島帯刀通政養子

安實 冨次郎
実安興二男 伊勢守 従五位下 宝暦七年十二月十八日叙任 同九年七月廿四日卒 二十歳 法名良孝院徳峯英俊

安利 一角
元文三年十二月九日卒

四年八月十一日卒 三十三歳 法名敬信院泰巌亮順

女子 甘露寺権大納言規長卿室 以後山城守政里室

安種 斧次郎 一角 図書
寛延元年十二月十三日卒 三十七歳

法名 定恵院圓岩自性

女子二人
一人早世
板倉美濃守勝久室

安實 冨治郎

女子三人
竹腰山城守勝紀室
片桐石見守貞陳室 後嫁一柳帯刀直住
於房 近江守勝朝養女

安親 熊五郎 図書
実加納田加賀守正陳四男 宝暦九年七月廿七日継

女子　早世

重貞　作左衛門
本多飛騨守重益養子

照武　幸次郎　早世

某　幸四郎　早世

正實　丹宮
堀田大和守正永養子

女子四人
木下左門某妻离別帰出
荒木九十郎政為妻离別嫁
本多秀允
櫻井梶右エ門能冬
奥山彦十郎和倹妻和倹死
嫁武田與五エ門信申离別
一人早世

安實従五位下淡路守
寛政九年十二月七日叙任
天明四年四月十三日致仕
同五年十二月十八日隠圖書
頭

安教　甚之丞
近江守従五位下安永六年
十二月十八日叙任天明元
年七月朔日卒二十七法
名順靖院廓道慧然

女子
板倉内膳正勝長室

安董　亀吉
従五位下淡路守

女子五人
京極加賀守高當室
二人早世
北条相模守氏昉室
田村左京大夫村資室

安種　帯刀

某　保次郎　早世

安致　右京

某　順之助早世

安徴　虎次郎

女子　早世

某　賢次郎　早世

脇坂

中務少輔従五位下安政ハ初ハ志摩守安吉と云淡路守安元ガ
子実ハ堀田加賀守紀正盛ガ二男也寛永十七年冬初テ
見ヘ奉リ慶安四年十二月廿八日叙爵し承応三年
三月六日家を継ぐ信濃国伊奈郡の地五万五千石叔父安元ガ遺
跡を継ぐ　寛文十二年五月十日播磨国龍野の
地ニ移さる安政ハ御前ヨリ先年以来公の常と
なる且ハ正盛ガ子なるを以て御譜代に准せらる龍野の
地城地なるに依て城地に准し城主と称す
天和二年更に譜代の列に加へらる貞享元年十二月
致仕して卯ノ年元禄七年四月廿六日卒
龍野にて行年六十二嫡子東市正安村ハ延宝六年
の秋病に依て廃せしより二男傳次某ハ世を早ふ
し第三男主殿安照嗣となり其後又延宝

六年為御祐筆叙爵して後備後守に任し貞享
元年十一月若君家にて従ひ宝永六年御代替付出仕と
なりし享保七年六十五歳にて卒す嫡子主殿
頭 諱 元禄十一年御祐筆 明ル十二年為従五位下
伊勢守に任し 後改備後守 宝永六年十一月十六日
御役を一角并利子采地にて合千石 二千 享保七年
二月二十八日卒して年七十子二人世をを子もし
八三男為之助貞興家を継 同十六年為叙爵し

二年大学英貞を家を譲り 末子他十人 英治に采
地にて合つ千石 正徳三年の為五十五歳にて卒す 英貞
元禄十年十二月為御祐筆し 宝永六年従
五位下信濃守に叙任し享保十年の五月四日奏者
番次第又寺社奉行 享保十七年春雲の介
老中に転し延享元年十一月九日年七十一七 嫡子主殿英持 初英
言 英長英能 正徳六年十二月御祐筆し 享保十年為叙爵して
伊勢守に任し 後信濃守 後改 延享元年為家を継 同三

年十二月部屋住の内より寺社奉行を兼寛延二年
七月部屋住の職のまゝ嫡子明和四年十月十五日卒二十二歳之
弟は主計頭伊勢守英常 初め英倩 宝暦七年某初て見えん
等り同七年家督叙爵父に従て家を継ぐ明和六年
十月部屋住寺社奉行加り安永四年九月卒三十二歳子
なく卒す弟主殿頭英積十一月父の後を継 時に十二歳
大隅守高兼有重か弟の大隅守春宗か嫡子に寛文八年
十一月六日家を継 和泉河内摂津備前西の内二万石 十二月廿七日従五位下にして

元禄六年亥年十八にて伊勢守嫡子主膳重直延宝
六年四月十日初て見え父卒す同年八月十六日家を
継同九年四月九日三十四歳にて病にて伊予守し
いふいまた何の嫡子も無しに重賢を嗣とせんとてや
ありしが主膳守およそ三十六年八月十六日卒
地除の事にて家絶ゆる

小出

藤原秀政

吉政

吉英

吉重

英安 万作 勘解由
備前守従五位下寛文六年十二月廿八日叙任元禄四年十二月廿五日卒年[illegible]

女子四人
一人早世
一人大岡伊予守増栄室
一人土方伊賀守雄隆室
一人早世

英益 鶴松 初吉図 右京
大和守従五位下元禄五年十月十日卒二十六歳

英道 八十郎
小出宮内英本養子

女子
実成瀬隼人正記女
実備前守長治室

英長 初吉住 名次郎 蔵人
実小出主殿英信男播磨守従五位下元禄五年十二月十八日叙任同七年十二月十七日卒三十七歳

女子
谷出羽守衛廣室

豊祐 万菊 内匠
初豊範
有馬中務大輔忠卿養子

女子二人
成瀬隼人正正親妾
立花主膳種明室

英直 万徳 左近 権之助
初吉晨
享保八年十二月廿六日致仕 同九年八月
二日卒 七十四歳 今小出右膳英顕祖

英及 久千代
元禄九年十月廿二日卒 三歳
家絶

吉親

女子三人
一柳藏直頼室
松平伯耆守重長室
加藤織部正直泰室

英和 ヨカ 宇兵衛 勘兵衛
初吉之
信濃守従五位下 寛文七
年十二月廿八日叙任 延宝
元年十月廿七日致仕 号常
蒙 元禄八年正月廿八日卒
七十八 法名青春院悦山常
蒙

女子
松倉内膳正重矩室

直次 宇右衛門
一柳美作守直家養子

女子
名古屋大夫氏和室

英利 大学
初吉尚 英治
伊勢守従五位下 延宝元年十二月
廿八日叙任 宝永二年四月廿二
日致仕 正徳三年二月十七日卒
五十歳 法名霊応院瑞峯義
光

英親 外記
小出百助吉忠養子

英清 熊之丞 頼母
後重高 重清
松倉越中守重相養子

某 岩松 早世

英貞 主税 大学
信濃守従五位下 宝永六
年四月十五日叙任 延享
元年十二月十九日卒 六十二
歳 法名泰雲院一叟紹貫

英雄 織之助 主膳
小出宮内英道養子

女子二人
一人早世
一人 相馬隼人貞照妾

女子四人
半井通仙院瑞堅妻
井上帯刀正照妻
小出小伝次吉明妻
井上帯刀正照後妻

某 山城国愛宕山威徳院

女子二人
吉英家人小出頼母重治妻
松平加賀守家人金森七之助某妻

吉直
実一柳蔵人直頼二男

吉忠 雷之助 百助
実一柳宇右衛門直照二男
今小出外記英便祖

女子二人
堀左京亮直長室離別

英一 兵助 初吉光
天和三年四月有故蟄居家絶

某 半之丞
早世

女子
早世

女子四人
一人早世
稲垣若狭守定淳室
一人早世
井伊掃部頭直幸養女

英治 作十郎 主殿
今小出富三郎英清祖

稲垣摂津守昭賢室

英持 数馬 主税
初英重 英智 英長
伊勢守従五位下享保十年十二月十八日叙任後改信濃守明和四年十月十五日卒六十六歳法名青霄院透嶺義冥

某
政之助 早世

英常 真三郎 初英勝
伊勢守従五位下宝暦七年十二月十八日叙任安永四年九月廿九日卒三十五歳法名霊源院猷峯紹機

英猶 七之 主税

英信 茂松 晴之進

女子
小出外記持皓養女

某 秀五郎 早世

秀家

二尹

有宗

有重 万助 三左衛門
大隅守従五位下寛文八年十二月廿七日叙任元禄六年五月廿三日卒五十八歳

重興 三郎助 玄蕃
元禄九年四月九日卒三十四歳

重守
元禄九年六月十五日卒十五歳

国立公文書館
National Archives of Japan

小出　附 伊勢守英安 大隅守有重

伊勢守房京英安ハ、勢守備吉之ト伝も 後理亮吉重ヵ嫡孫にいまし勤

番となし時寛永元年十月廿八日初て見へ奉り 寛文

六年叙爵し 延宝元年十二月十六日家を継て 四万五千石 但馬出石の

城 主たり英重ヵ所領をわかつ 和泉国 千五百石 元禄四年又自ら

致仕 三月廿六日 五十五歳 嫡子右京英益 延宝六年九月十六日初て見へ

奉り入り七年の冬従五位下に叙して大和守に任し 元禄

五年三月十六日父の遺領を継ぐ 五万石 和泉国の領分を記録

載る子なき故、嫡孫なるも 但英安ヵ時加増の地存して家督をも 英益早世して 元禄十四年十二月廿六日卒 子

なしヵハ支族英長を養ふて嗣とせり 英長ハ三殿英信ヵ二男なり 英信

ヵ遺領二千石の内五百石を分ち与へり しヵ此時采地を公収せられし事也 英長十二月十日家を継て従

五位下播磨守となり 同七年十二月三十歳にて卒す

其子之千代英及又同九年二月十日遺領を継しも

幼稚なる故ハ家禄の事ハ一族ともの手へ 其親属

保下ま遣し 享明九年の十月廿六日三歳にて卒し遂に

家絶たり

従五位下英知初吉文伊勢守吉親の嫡子寛文
七年十一月九日吉親致仕の跡を譲らる 此時所領二万九千七百石余秋田
と合て三万石の内二万五千石ハ英知に領り五千石ハ吉親致
仕後の分とて養子にて死後子ハ吉紀を養子とす又三千石
百助吉忠に二千石を分ち同しく分知せし後吉紀の子
分与へし故に吉紀ハ一柳家へ入りて二男吉忠ハ一柳宗家主次
二男をもつて吉
紀か孫なり
しの名叙爵し延宝元年十月致仕す
幾と号し元禄八年七十八歳にして卒せし長子大学
英利 初吉高 英治 寛文八年秋初て見え其年家を継て従
五位下伊勢守に叙り宝永二年四月廿六日致仕し

て中務少輔に任し後壱岐守に改る 延享四年の秋 二十三
歳にて其の嫡子主殿為弘十月家督を継 宝
暦四年三月初て出仕し十二月従五位下に叙中務少輔
に任す七年七月廿八日にて卒し子無りしかハ八歳当
治子為賀て養として嗣とし九月家を継て十二月従五
位下伊勢守に叙任し同九年七月廿四日廿歳に
て世をさりし事无子無りしかハ同廿九日一族為
親として家を継為親の福田加賀守正縁の四男

そ一番め程の家にて終りいまだ傳る家にて終りぬ
采地二千石ハ収公せらるゝ於て程にし十二月叙爵して淡路守
成り天明四年四月十九日没ス法名 時に四十九才法名何らむ 是後嫡子を
淡路守泰教ハ世を早く去りて（嫡孫）ハ二男亀吉か董ヨ家を讓
る於董としの春神で元年し家続て明ル年の冬
從五位下の淡路守贈ル十七歳

加藤

藤原貞泰

泰興

泰義

女子 松平新太郎光政室 池田大学長久母

泰恒 五郎八 初泰経 泰常 遠江守従五位下寛文十年十二月廿八日叙任正徳五年七月九日卒年七十九法名英久院傑山紹俊

某 十之丞 早世

某 五郎八 貞享二年十一月廿日卒

女子 早世

泰統 己之助 左門 隼人 出羽守従五位下元禄十六年十二月廿六日叙任享保十二年六月廿四日卒三十九法名顕徳院圓恵紹明

某 小十郎 早世

泰温 隼人 初泰古 泰見 遠江守従五位下享保十四年十二月十六日叙任延享二年六月十四日卒三十四才法名大心院泰叟玄高

女子 早世

泰觚 覚十郎

泰孝 頼母 初泰長
加藤兵助泰茂養子後帰

泰寶 初名新助
本空院大僧正

泰久 岩五郎 求馬 杢(?)庫
出和泉守宗碩養子

某 源十郎 早世

女子二人 早世

某 市之助 早世

女子二人
一人早世
板倉讃岐守易信室 離別
嫁伊蔡伊賀守長丘 離別
嫁喜連川左兵衛督茂氏

泰都 織之助 左兵衛 伊予守
加藤兵助泰茂養子

女子 早世

泰廣 右京 大藏
次郎泰貫養子

女子三人
二人早世
徳大寺大納言実憲(?)室

女子 早世

泰衍 鏖之助 主馬
実伊予守泰都長男 出羽守従五位下 延享二年十月十八日叙任 寛延元年七月廿日陞遠将監 宝暦十三年二月二日致仕 同年十一月十五日陞上總介 天明二年七月十九日陞加賀守 同四年壬正月廿二日卒 年七十 法名寛厚院仁叟道儀

女子六人
泰衍室
岩城伊予守隆恕室 離別
嫁瑯(?)部負(?)直秀
并嫁加藤總十郎泰宗
三人早世

泰武 冨之助 初泰政
実泰温男 遠江守従五位下 宝暦十一年十二月十八日叙任 明和五年五月廿七日卒 嵩戈

女子
稲垣摂津守長以室

泰行 瀧口作十郎

恵氏 金三郎
喜連川右兵衛督氏連養

女子二人
一人早世
毛利伊勢守高標室

泰行 瀧口作十郎 造酒進 初泰顕 泰英
実泰衍男 出羽守従五位下 明和五年十二月十八日叙任 同六年五月十三日卒 十九才 法名本源院天性宗真

女子
松平越中守定信室

泰武 富之助

直英 式部 弾正
又十郎
溝口修理直福養子

泰候 初泰稈
辰千代 次右衛門
継泰行遠江守従五位下叙
四年十二月十一日叙任

某 健五郎

女子二人
一人早世
出雲守泰賢室

安豊
加藤弥之助泰輔養子

泰周 舎人

泰定 作内
初泰重

某 加治馬 早世

女子二人 早世

某 帯刀 早世

女子

某 次郎四郎 早世

泰倫 千太郎 早世

直泰 大蔵 織部
織部正従五位下万治三年十二月廿八日叙任天和二年正月五日卒六十八歳法名要受院一moss直入

女子
板倉内膳正重通室

泰郁
実美作守泰義三男出雲守従五位下寛永六年四月十五日叙任享保元年十月十三日致仕改泰忠同十七年二月廿四日卒七十四法名万了院風外清雲

泰廣 右京
初泰春
実遠江守安恒七男織部正従五位下享保十一年十二月十九日叙任後陸奥守宝暦六年八月廿六日致仕

泰官 右門
近江守従五位下宝暦六年十二月十八日叙任同八年七月六日卒二十五才法名仁良院諱崑慧讓

女子

泰貫 大七郎 大蔵 宮内
初泰位
大蔵大輔従五位下享保元年十二月十八日叙任同十二年六月三日致仕同十三年九月廿一日卒五十三歳法名元祐院徹山宗峪

泰極 内膳 早世

女子
松平数馬信房妻

泰賢 覚十郎
出雲守従五位下天明二年十二月廿八日叙任

女子 大久保傳之進教慶妻

天明二年十月九日從山城守
同四年二月十六日卒七十七歳
法名指華院光翁玄徹

女子
大久保江七兵衛教平妻

某 犀吉

泰友 恒吉

某 鐙吉 早世

某 大膳 早世

某 辨弥 早世

某 靱負 早世

某 粂 早世

直道 修理
高力大学直賢養子

女子 二人 早世

政泰 男也
蒲生六郎右衛門政永養子

女子之 一人早世
近藤隼人用常妻 爲別
嫁大久保豊前守忠温

泰由 半之進

加藤

遠江守泰恒ハ初泰経 出羽守泰興が孫也 父は内蔵介泰義
泰興よりさきに失ぬ 仍て泰恒ハ祖父の世継となりて寛文六年
四月十六日初て見えたてまつり 同十二年叙爵し 延宝二年
二月廿五日家継で 五万石 伊予国大洲の城 叔父二人に其地
を分つ 弟泰堅左兵衛泰茂にあたふ 新墾田千五百石 正徳五年七月卒
年も五十九也 嫡子泰統ハ世をつかし 二男隼人
泰統元禄十六年冬初て叙爵して出羽守となり父の卒せし

寛延二九月家継て享保十二年生三十九才にて故病死せり
如婦子隼人泰温初ハ泰吉又泰尼家を継け十四年冬従五位
下遠江守に叙任し延享二年冬三十四才にて卒ありし男
子なかりしかハ支族伊予守泰郁か長子養て泰
衡として家継も泰衡父か家をもゆるし時先人之御小
納戸の席に召かくもしかりみや佐久て免九まて
此年八月泰温か遺跡を継り十月十八日従五位下相成
子任も後死も物出宝暦十二年二月十日叙任し上総介加賀守に改む

同四日卒陰四月十七日辛年五十七才嗣子留し助
泰武初ハ泰致ハ叔父の遠江守泰温の遺跡のあと宝暦十二
年初て相継従五位下遠江守叙任して明和十二年
泰衡か譲りを受明和五年其廿四才にて卒ス也如
泰衡か男造酒之助泰行にて養ハ七月家を継此年
従五位下叙爵し明和六年其十九歳にて
卒なりし久米泰候家を継時二十四才安永四年
寛政叙爵し遠江守に任して年仙内泰定

織部正若年寄ニ而致仕 時ニ依テ嫡子元禄年七月伊予
五郎右 此一万石 万治三年ニ叙爵シテ天和二年卒ス年六十八才
三年織部泰鯨 泰忠 初め 実ハ以来泰義ノ三男實ハ
十年四月十三日初而見エ奉リ入リ天和二年三月十三日家
督ス 宝永六年四月十六日従五位下出雲守ニ叙任シ
享保元年十月十二日致仕シ同十一年卒ス七十一才ナリ
卒ス 嫡子大蔵泰貫元禄元年六月初而見エ
其ノ家督シ後従五位下ニ叙シ大蔵少輔ニ任ス

享保十二年致仕シ同九年九月廿三日卒ス五十三
三年右京泰広 初め泰寿 実ハ遠江守泰恒ノ七男享保九
年五月初而見エシ同十三年父ノ致仕ノ日家ヲ
継従五位下織部正ニ任シ 後山城守又出雲守ニ改 宝暦六年四
秋致仕シ天明元年卒ス年七十七才 長子泰嶠
宝暦三年三月初而見エシ同六年八月廿二日家督シ
其後従五位下近江守ニ叙ス 明和八年秋三十
歳ニシテ卒ス 嫡子範十郎泰賢 父ノ継代

時ニ嫡孫天明二年冬叙爵シテ出雲守ニ任ス

谷

源衛政

衛利

衛広 助十郎
出羽守従五位下 寛文三年三月廿八日叙任 元禄十五年十二月廿日卒 四十六才
法名源忠

女子
油小路権大納言隆貞卿室

女子
谷帯刀衛因妻

貞澄 源三郎
高槻清右衛門重澄養子

衛紀 一字 早世

照憑 鶴千代 大学 右京
播磨守従五位下 宝永六年三月七日叙任 享保二年十月廿二日致仕 宝暦四年八月四日卒 八十一才
法名

女子二人
有馬玄蕃頭則維室
酒井紀伊守忠貫室

衛衝 ミチ 勝千代 右京
出羽守従五位下 享保二年十二月廿六日叙任 宝暦十一年四月八日致仕 同十三年五月十六日卒 六十五才 法名
子無

女子
有馬玄蕃頭則維養女

女子 清水甲斐守一都室

女子 谷荘右衛門衛明妻 離別

衛将 勝千代 大学
明和元年正月廿一日卒 三十七 法名元明

衛秀 鶴次郎

女子四人
一人早世
内藤頼母信智妻
小倉宰相中将貞季室
谷頼母衛明妻

衛秀 鶴次郎 図書
実衛衡二男 播磨守 従五位下
明和二年十二月九日叙任
安永九年八月十六日卒 五十二
法名一万中

某 岩之助

某 岩之助 早世
実衛将男

某 済之助 早世

女子 谷織之丞勝衛妻

衛量 鶴太郎
従五位下 大学頭 天明五年十二月十八日叙任

衛睦 外記

女子 蒔田図書広寧妻

景熙 極馬
遠山織部景義養子

谷

出羽守源衛廣ハ大学衛政（初名又大学主殿とも記す）か孫也父ハ是九介
早利世を早ふし衛廣ハ祖父の嗣となり遂ニ元
和年初て兄へ参り寛文三年三月廿五日家を継（丹波山家の）
地一万石余出羽守叙爵して元禄二年の歳も十二月廿一卒（年六十七）
長子主学出紀ハ世を早ふし二男右京照憑ちか貞享

二年亥神之兄系ト云様三年四月父ヨリ遺跡ヲ
継ケリ乙八月廿八日奥詰衆ニ准セラレシカ明九年ノ
五月また元のことく御番を仕へしと仰ありて宝
永六年の春従五位下備中守ニ任シ享保二年の冬
致仕し十一年右京亮となるを譲り同三年五月
病て養子となりし下館山家より宝暦四年又卒年七十八月
廿一兵衛享保元年七月召神て君の命ありて家譲り其て
後従五位下前関白家宝暦十二年四月廿八日致仕し

木下

豊臣家定 — 利房 — 利當

利安 主殿
実利貞四男 以躬行不脩廃嗣子剃髪 號省閑 延享四年五月十日卒

女子
実遠山信濃守友貞女 浅野壹岐守長恒室

女子二人 共早世

利貞 兵ア
於備前從五位下
寛文三年十二月廿八日叙任
延宝七年四月廿六日卒五十

女子
遠山信濃守友貞室

伯定 熊之助 宮内
肥後守從五位下
延宝七年十二月廿八日叙任
享保十四年五月二日致仕

伯福 織部 初量寛
実内蔵頭俊長二男
享保十二年六月廿日卒四十七歳

女子二人
利潔室
片桐主膳正貞音室

利潔 文次郎 兵ア
実内記藤策二男
兵ア少輔從五位下
享保十四年九月十六日叙任

三歳
法名慈光院乾德利真

女子三人
関九門永弘妻
後離縁杉本長九郎勝曲妻
勝曲後妻

正長
家人
瀬川平平兵衛長子

享保五年十月十四日卒年
八十
法名敬文院観窓慈定

女子二人
一人早世
平野丹波守長政妻

藤榮 牛之助 内記
初称金兵
享保九年十二月十七日卒
二十七
今木下高々利恭祖

女子
早世

後改美濃守
元文五年閏七月廿二日卒二十
歳
法名親光院性峰高隣

紀林 小大郎 刑ア 内記
宝暦三年三月廿六日卒二十
九歳

藤香
宝永六年三月廿日卒

利潔 文次郎

女子
土方主殿頭雄端室

女子
京極備前守高久室

紹諲
京都建仁寺中常光院

利安
主殿

女子
左エ門佐後胤室

利寛
豊之助
明和五年九月二十日卒十二歳

女子
新莊駿河守直視室

女子二人
早世

利忠
定太郎
宮内少輔従五位下
宝暦四年十二月十八日叙任
後改肥後守
天明四年七月十七日致仕

女子二人
石川進殿總相妻
織田式部信之妻

利春
左京
本多大膳将成養子
後帰

利彪
留五郎
従五位下淡路守
天明五年十二月十八日叙任

女子四人
一人早世
木下萬之助利恭妻
酒井下野守忠休室
実利春女
手野九左エ門長充妻

女子

某
定太郎
早世

女子
早世

某
留五郎
早世

女子 早世

卌 延俊

卌一 俊治

女子 相良近江守長興室

某 千勝 早世

某 嶋千代 早世

某 多門 早世

女子 早世

女子

女子二人 肥後守乂定室

女子三人 二人早世 木下縫殿助栄俊妻

某 富之助 宝永七年四月廿六日卒三歳

女子 久留島信濃守光通室

量道 豊之丞 享保九年七月朔日卒去

女子三人 大久保弥十郎忠員妻

三世
俊長　主計
左衛門大夫　従五位下
寛文九年十二月十八日叙任
宝永四年九月十二日致仕改
内蔵丞
享保元年九月八日卒
九十七
法名桂峯院英岳宗格

長治　覚助　九兵衛
木下長兵衛俊重養子

女子
伊東播磨守長祐室

四世
俊量　式部
式部少輔　従五位下
貞享三年十二月廿六日叙任
宝永四年九月十二日改
右衛門大夫
正徳三年四月十二日改
右衛門佐
享保十四年閏九月朔日改
伊賀守
同年十月十二日卒　五十八
法名徳音院俊量廣哲

甘粛　辨之助　早世

女子
松平主水義見妻
横山内記清章妻

五世
俊在　敬之丞

某　元之助　早世

女子　早世

紹策
京都建仁寺中常光院

女子
稲垣対馬守重富室

量寛　織部
後名白福
肥後与八右衛門養子

女子　早世

長保　千五郎
長胤養子

俊重　長兵衛
元禄七年七月廿五日卒
六十七

長治　覚助　左兵衛
実俊治二男
正徳四年卒　五十七

七世
長盬　岩三郎
寛文三年十二月二日継長保
寛保元年十二月廿四日卒
十九
法名義善院鐵山梁船

俊能　幸之助
寛保元年十二月廿五日継長盬
式部少輔　従五位下
寛保二年十二月十八日叙任
寛延元年八月晦日卒　二十
四
法名心亮院閑清浄安

長亂 求馬
享保二年卒十八才

六世
長保 十五郎 主税
実俊長四男
享保十六年十二月廿八日継俊立
和泉守従五位下
享保十八年十二月十六日叙任
元文三年八月九日卒三十三才
法名龍渓院圓應浄覚

俊泰 内蔵助
寛延元年九月十四日継俊能
大和守従五位下
寛延元年十二月廿一日叙任
明和五年七月九日卒四十三才
法名靈祥院俊岸泰英

某 内蔵助 早世

某 亀之助 早世

俊亂 荘九エ門 寿
実戸田越前守忠余男
左エ門佐従五位下
明和四年十二月十六日叙任
安永五年五月廿日卒二十才
法名恭徳院従邦巖馨

女子
戸田因幡守忠寛養女

十一世
俊懋 千勝

女子六人
横山兵庫助知雄妻
高井九エ門常房妻
許嫁大久保栄吉忠慶早世
山崎主税助義憲室
溝口式蔵林清妻
小笠原豊後守信成室

女子
実肥後守利忠女
俊亂室

木下

淡路守従五位下利貞ハ故の淡路守利当嫡子寛
永十九年にうまる寛文二年二月
廿四日家をつぐ（備中国の内二万五千石）同十二年の冬叙
爵し従五位下寛文七年の某年以二十嫡子にて同
分従（安臣利房をいふ）寛文四年四月十二日初見え
まり又ゐうせし年の八月十二日家を川まで
菅川純房家（母はりつきれ々ゑと様より）下屋敷に於川（二千石）

十二月従五位下にして肥後守に任ず子
なかりけるにより弟の宮松利治を嗣子とせ
しに病によりて其事やみて一族
同苗孫四郎長種の三男御部分初家て春日
しけるに是もまた早世しければ弟利光
前田の二男文次郎利豊を養子としてつかふ
享保十二年七月九日ゆるされて家督を継
同十四年十二月二日父の跡を継ぐ利隆に

家を譲りあたへらる其のち七十八歳にて
うせぬ利隆家をつぎて後従五位下に叙し
に備に叙せしが後に備後守にうつされ元文五年の十二年
七月にうせぬ年廿二歳是より先利忠九月廿
二日家をつぎ宝暦四年十二月従五位下の叙
せらる宮内少輔にうつる同四年十二月廿
七日致仕せらる嫡子重教卿利献に
明二年十二月家を継ぎて其後に

まゐりて又其後任ぬる由ゆへりとぞうけ給はり（附 日 家判）
あくる年の冬叙爵して隠岐守に
任ぜらる
右馬助豊臣勝長は伊勢守勝俊の長子
也 天治元年二月廿五日生れ給ふ
寛文元年六月十二日家をつぎ（采地二万五千石）
十二月叙爵し嫡男式部勝貴は貞享元年
の嫡子なり 天和年 貞享三年の冬

従五位下の式部少輔に任ぜられ（勝長寛文十二年つけ給ひし）
も 勝長寛永四年九月十二日没し給ひぬ（同前）
も 所領の地を 今より享保元年の秋
六十四年にてうせ給ひぬ 勝貴寛永年
家をつぎ享保十四年の冬五十八にてうせ
給ひて ありまさ世をさりし 六男
嫡男勝全父のあとつぎ 同じく十六年十二
月九日に十八にてうせ給ひぬ

まはのうちうく叙爵入道統長保ちかき事侍るの家督にて一族
兼ぬる長秋の事をつぎ世尊寺流の書をかけりと語りきこえしもことはりなり
かゝりけれ侍従いまだ若者にてはかなくもたえはてし
うたゝねのうちにもありし世のかたみとなりけりしに列
の侍らし長保しく家をつぎてつかさどる二月
ふしの時長保の康永うち侍は此事より帰長保松前十八年十二
月従五位下に叙し和泉守に任し元
文三年の秋七月三日に卒したまひ子
なかりけれは後室の八男君を申し長堅ま
をやう十二月二十日家の名をもつらねしに寛保元
年の冬十九日にはかなくなりぬるとも嗣子
なかりけれは弟なる章長御侍従にてありし者
つかせし侍従なるに二年従五位下に叙し備
後守に寛延元年の秋十日にして卒したまひぬ
ますます子なかりしかは弟内蔵助俊春へ嗣し
此経卷は九月廿四日家の事をしるし十二月叙爵す

寛文十一年十二月従五位下に叙す
はしめ父の子として嫡子なりしか世をはやくせし
ゆへに舎弟越前守忠(?)家督を
ゆつらん事を願ひけれは願のことく同年の冬にいたりて
家督をつき従五位下に叙し将監となる
其年の暮後(?)四十二歳にて卒しぬ
法名(?)元年五月廿二日卒
寺(?)嫡子壱岐守頼喬(?)時に十二歳

相良

藤原頼寛

頼茶　長次郎
壹岐守　従五位下
延宝四年十二月廿八日叙任
同五年十月廿七日卒　十六才
法名慶光院文渓了鑑

頼真　宮内
宮内少輔　従五位下
貞享三年十二月廿六日叙任
元禄元年五月廿五日卒
十八才
法名寂浄院覚明玄真

某 式部 早世

女子 早世

某 葛吉 早世

某 又四郎 早世

頼喬 長次郎 初長武 頼房
遠江守従五位下

頼福 葛満 妾 初長房
実家人相良兵部助長秀

女子 家人 某妻

長興 金之助 初頼以
近江守従五位下

宝永四年十二月廿二日叙任
享保六年七月十一日致仕
同十九年十一月六日卒四十六歳
法名随流院実山玄幽

女子 早世

武慶 数

女子 早世

頼利 右近
萬治三年十二月廿八日叙任
元禄六年正月廿四日卒
六十三歳
法名大雲院俊翁含英

長男
志摩守従五位下
元禄四年十二月廿八日叙任
正徳二年九月廿四日致仕
同四年十二月三日號梁誠
享保五年三月五日卒七十二歳
法名広厳院梁重大郎

栄長 兵庫
早世

某 岩次郎
早世

長敬 求馬
早世

女子
早世

長浩 九内

某 数馬
早世

長在 求馬
初長敬
実頼福五男
一遠江守従五位下
享保五年十二月廿八日叙任
元文二年十二月廿五日卒年
六歳
法名雲霄院泰嶺実岫

女子 家人某妻

頼峯 政太郎
志摩守従五位下
寛延三年十二月十八日叙任
宝暦八年四月廿四日卒年二十
六歳
法名秀徳院雄山玄英

女子

頼央 頼母
初瀬氏
実家人相良織部頼直長男
遠江守従五位下
宝暦八年十二月十八日叙任
明和九年八月十七日卒年二十七歳
法名祥麟院華嶽仁封

女子
前田大和守利尚室

某
織部
早世

女子
本多大和守忠堯室

頼完
民部 長三郎
初晃長
実松□□伯耆守□□三男
近江守 従五位下
明和二年十二月十八日叙任
同四年五月十七日卒 年十九才
法名 高嶽院英巌亮俊

福将
源次郎
初文元
実遠山佐渡守□□二男
載前□守□□
明和四年十二月□□叙任
同六年五月十二日卒 年二十才
法名 泰雲院雲嶽道樹

長寛
護之進
初政長 長泰
実松平伊豆守宗政二男
従五位下 壹岐守
明和七年十二月十六日叙任

義休
政太郎

頼徳
武之進

頼匡
金三郎 中務

女子
溝口亀次郎直候室

相良

喜内事義殊教斎 初名長武 又教房 八丹波守教寛か子

なり正保三年十二月廿九日はしめて大猷院

万治二年の冬致仕して寛文四年十一月

七日父かゆつりをうく 此時采地のうち 城方二千石 元禄十二年

正月廿七日卒年七十六 六十二歳 嫡子喜兵衛教英 家督ゆつりし 教英と改

二百三十石 右衛門教貞世に出すしてさきのことし

貞享元年十一月十八日家にて 卒 行年五十

御長男ハ長男采女相福〈初名壽也〉なりけり
嗣とし元禄三年のちまきつ相福ちからを
つくされ明くる年の正月元服かつ叙し
志摩守と任し同じく十六年の四月十日剃髪
つゐに正徳二年の九月廿七日致仕の後くして
果報して歸し享保五年十二月廿二日卒〈三十一才〉
嫡子長興〈初相政〉相見寛永元年十
月朔日ハ御中と相属しに同年の冬に從五位下
の也に任す正徳某年の嫡家をつぎし
享保五年の嫡孫として同十九年の冬
御法の為に早年嗣子ありしがなくて卒し
采女長孝〈初長救〉を子とし次男長享保五年
七月二十一日に叙して從五位下の
遠江守に任し同じく六年七月十六日家督きて
寛文三年より家領の地をしてしゆ遂
まして歸と嫡し相次ぎて大夏と同じく

ましましぬ　新に二千六百石○長生の例にて采地
御預せられしをあり隠切神職の
事は寛永従来濃州お預かりて　秘書摂府隠切の与力に神職の綾ども
その子政方御若年
十月十六日父の逝去にあひて寛延三年の
冬叙爵して其後故ありて宝暦八年
の夏わつか六歳にして次子なりけれはなし
家人羽長織部後妻の長子叔母叔父
にて仲をかし家つかす叔父として叙爵し
て卒仕しに元年の冬其六十五卒し

しかし其後子恐れ織部叔父荒長実
秋月佐渡守大錦種美の三男なり十
二月十日家をつき明和二年の冬従五位下佐渡
守に叙任し四年其夏十九歳にて
卒せしか子保科弾正忠実は
佐渡守友成の三男なり三月九日逝去
ての十二月叙爵して越前守に任じ
せらる六年の冬二十四歳にして身まかり

しかるに松平伊与守源宗政か二子讓しを長
寛文に子としし寛永の比長寛か此しきり
七年の冬に従五位下の壱岐守になり 但馬
堺 ちちり

秋月

大蔵種春

女子
六條中将有綱卿室離別

女子三人
一人早世
本堂孫七郎玄観妻
花房右近正矩妻

種恒
伊勢千代 右京
出羽守 従五位下
寛文九年十二月廿五日叙任
同十二年七月十七日卒十八才
法名松嶽院照室宗良

女子
大森三郎 景妻

種信 黒帽子 兵ア
主殿
佐渡守従五位下
万治二年十二月廿八日叙任
元禄二年十二月晦日致仕
同十二年七月廿七日卒 享年
九十一歳
法名天洪院龍山宗雲

女子

某 半之丞

種政 万作 兵ア
山城守従五位下
延宝五年閏十二月廿八日叙任
後改長門守
宝永七年閏八月二日致仕
享保元年閏二月廿六日卒
五十九歳
法名天祐院慶嶽宗善

女子
安ア丹波守信峯室

種封 実三郎 式ア
初種重
今秋月式ア種備祖

種弘 黒帽子 兵ア
河内守従五位下
元禄十四年十二月十八日叙任
後改山城守長門守
享保十九年十二月十二日叙任
宝暦三年七月十一日卒 享年
七十七歳
法名瑞應院恵山宗是

女子三人
二 服部若狭守安清室
八 日下出

女子

湛栄
下総国飯沼弘経寺

種利 大助 ■門

女子
播肥前守鍋信養子

勝親 万作 織ア
佐久間安房守勝豊養子

女子
北條遠江守氏朝室

女子
相良遠江守長在室

女子
秋月佐京種武妻

種美 兵庫
従五位下仇波守
享保十七年十二月十六日叙任
宝暦十年七月八日致仕
明和四年七月四日改[illegible]守

女子
秋月主殿種彦妻

種頼 黒帽子ノ 式ア 初種武
岩城守 従五位下
宝暦七年十二月廿八日叙任
安永九年十二月十三日改佐渡守

女子四人
家人 山田平八重遠妻
一人早世
家人 内田新五郎正矩妻
家人 手塚武八郎吉経妻

治憲 松三郎 直丸 直松
初勝興

頼完 民ア 長次郎
初晃長
上杉大炊頭重定養子
相良遠江守頼央養子

女子
家人 山田牧右エ門久知妻

忠快 大助 益之助
大久保弥三郎忠厚養子

某 亀三郎 早世

某 政次郎 早世

種徳 黒帽子 式ア
山城守 従五位下
安永九年十二月十八日叙任

女子
家人 山田権十郎重礼妻

長舒 幸三郎 仲輝
継黒田千之助長堅家

女子
家人 中村仲道義妻

某 岩次郎 早世

某 常三郎 早世

種備 和三郎 式ア
秋月式ア種徽養子

某 松五郎 早世

女子
家人
柴垣千作定信妻

種懷
此面
仙之助

女子
家人
泥谷静磨直之妻

信義
文之助
兵庫
中條大和守康陸養子

女子
榊原主計政栄養子

利國
文十郎
斎藤左源太利起養子

某
黒帽子
早世

秋月

佐渡守大蔵種信ハ長門守種春か嫡子なり正保

三年三月廿五日はしめて見えたてまつる万治二年

十月廿六日家をつく　此時三万石を領す　叙爵　元禄

二年十月代吏役仕に拝せし嫡男　山城守種政をして

あとを継しむ　藤原ハ種政か家をつかしむ　をしへあたへまいらす　二男　兵部

種政か家を継　三万七千石　三男　式部種貞ゟ

来てわかつ　後に　出羽守　十二年七月廿七日卒　七十

九年をへて辛卯 赤穂にて寛文九年に辛卯と記せしはあやまり 播磨寛文
十二年二月八日より見えて是をのし庭室五年の
冬に従五位下に叙して山城守となりし 後出雲守
宝永七年正八月に致仕して享保元年の春卒
九年をへて辛卯嫡子出羽守種弘元禄十三年
八月九八日叙爵して同年十四年の
冬に従五位下の河内守となりて 後山城守と改む
宝永七年の嫡家つぎて享保十九年十二月

致仕し宝暦三年七月卒す 六十七歳 その子出羽
種義享保十七年の頃より見えて人々として
しのぶ叙爵して 備前守に任ぜ 後出羽守と改む
十九年家つぎて宝暦十二年七月八日致仕し
同年十二月卒 嫡子出羽守種載 初種武 宝暦六年の冬叙し
爵してたて備前守となる同年の十二月従
五位下として山城守となりあらためしに十年
京都 つき 嫡子の子出羽種信安永七年十

月ニ至リ又寛文九年十二月
十八日従五位下ニ叙シ山城守ニ任ス

宗

二十世
平義智

二十一世
義成

二十二世
義真 彦満
播磨守 従四位下
明暦元年十二月廿三日叙任
同三年十二月廿七日侍従
改対馬守
元禄五年六月廿七日致仕
改刑部大輔

某 彦満 早世

女子
実轉法輪右大臣公富公女
永井市正直時室

義倫 右京 初義龍
右京大夫 従四位下
貞享元年十二月廿五日叙任
元禄五年十二月十八日侍従
改対馬守
同七年九月廿七日卒年二十一
四世

同十五年八月十七日卒五十二
四十八
法名天龍院高巖宗屋

女子三人
轉法輪前右大臣公富公室
松平備前守正信室
太田摂津守資次室

法名悪光院心嶽宗観

女子三人
日野中納言資茂卿室　資茂卿卒
嫁徳大寺内大臣公全公
亀井隠岐守茲親室
毛利周防守高慶室

真周　蔵人
家人
吉川治右衛門某養子

五世
義方
元禄七年十月廿五日逝
根緒次郎

某　彦千代　早世

六世
義誠　増之助　式部
初方誠
実義真六男

義倫
侍従對馬守従四位下
元禄九年十二月廿二日叙任
享保三年九月五日卒年
五十才
法名大衍院真乗寶輪

女子
醍醐右大臣冬熈公室

倫寛　右門
家人
岩田與左衛門真章養子

方誠　氏江増之助

侍従對馬守従四位下
享保三年十二月朔日叙任
同十五年十一月六日卒三十
九才
法名大雲院玉樓高岳

某　岩丸　早世

如喬　村岡右京
嵜家人

七世
方熈　樋口主馬
享保十六年十二月十三日継
義誠
侍従對馬守従四位下
享保十六年四月廿五日叙任
同十七年九月十三日致仕改
民部大輔
宝暦九年十二月廿九日卒六十六
西戈
法名清浄院涼池心水

八世
義如　弥一
実義誠男
刑部大輔従四位下
享保十六年十二月廿六日叙任
同十七年九月十三日改對馬守
同年十二月十六日侍従
宝暦二年正月廿三日卒三十一
七戈
法名圓鏡院正室妙因

如連　維敞
家人
樋口佐兵衛門直速養子

女子
難波大納言宗誠卿室

女子二人
藤堂大学頭高治室
松平遠江守忠名室

義如　弥一

女子
大炊御門右大臣家孝公室

義蕃　氏江主水
初如苗
宝暦二年二月廿三日継義如
侍従對馬守従四位下
宝暦二年四月廿六日叙任
同十三年閏四月廿八日致仕改
式部大輔
安永四年八月十三日卒五十一
九戈
法名大頴院法如毅禅

蕃壽　氏江玄庫
爲家人

女子 醍醐右大臣経胤公室

如式 弥一 早世

廿
義暢 直孫 直之助 十五
寳暦十三年四月廿八日継
義蕃
侍従 対馬守 従四位下
宝暦十二年十二月十五日叙任
安永七年十二月廿二日卒
七才
法名真常院施法循室

義功 猪三郎

某 下野

女子

如泰 土佐
家人
俵主膳方紹養子

暢朝 美濃
家人
樋口弥五左エ門加基養子

国立公文書館
National Archives of Japan

宗

對馬守平義真（初め彦満 義真と改む）ハ故の對馬守義成

か嫡子なり[illegible]寛永九年

の[illegible]御[illegible]内[illegible]

[illegible]（時[illegible]）正保三年五月九八日[illegible]

出仕し明暦元年の夏従四位下に叙し[illegible]

[illegible]二年十月廿七日家継[illegible]

侍従に任し[illegible]人[illegible]の[illegible]

相録将来の事どもはげしく成たりけるに御下
さりし正徳二年の冬病中の御いとま大事ありしに
武家諸法度をしるしあらためられ三年の夏藤毅
もたりけり 二万石○加へられ又のちに志ありて賜はりし 天和二年
の頃御代かはりに来し朝鮮の信使
達館にて義真と出合ふことありて来まで
詠しけれは歌ありて九月十日から晴れたれて
帰使にまぬかれて国へ加はりて元禄五年六月
叙任ありし 刑部大輔に なされし その子右京義倫 初ハ義紀 従五位
年十二月廿三日に家督をつかせ貞享元年の冬
従四位下の右京大夫にて侍従に叙せられて侍従
兼帯せしむなり元禄七年九月廿四日卒しぬ
嫡子なりけるは早くうせしの十一月養子次郎義方
新に宗家を継ぎて継がしめ義方は今切弱なれば
朝鮮の事を思ひ携りしは又義真にかけ給ひて
仰下され義方あつかるべき九年の冬

從四位下の侍従に叙し對馬守と名乗れ
しかるに十四年九月十八日和殿のゆるしにて義方に
跡つかしめられ義真隠居しつゝ世をは
のかれて出家ありて天竜院とかへして同十二年
の七月七日義真薨す、よはひしるしかたき
六十四年義方正徳元年の朝鮮の使
きたりしに無程やかてあはれ附義方さしのぼり
に東道のあないしまたふ川にて
りて御饗応の事なとつかさとりしかは
おほかりしかは義方もちからをつくしけれは
将軍家もいたく感し給ひける
将軍家より御賞ありて其の家臣柳川某に賞あり
其の世に立にき [illegible] 享保の御代の
ちかきころ又朝鮮より使きたるへき
よし義方承りてつけまかなひし
ありけるにかゝりしほとに三年正月

そのしるしにや九月廿五日に府中の
はかのしも越前の守三千世国にて
かみおもひけるにしも肥後の国州へくだ
さしかハ藤原式部卿宇合の
すゑ義淵にて十一月はつきて死し
従四位下の侍従に任し對馬ちかなかみの
すくれいとかなしき府中よりあらは
此年の九月にかの女の使せしよりても
此人ハまた事なとも申されける
かくて十五年十二月に義淵三十九にて
しなとものの御經いまは於れにしかハ
まへ大納言口宣方上しくかきそへて
やまとしてあらた十六年二月廿一日
方にてあしく建立してさる方に任する
あれはしきて家のまゝにかへ
こなたさまし松本へ廿九にて従四位下の

侍従兼對馬守たかなり方興風のくとおりの
跡之義ぬしとなりしすなはちおなじく二十三
つくえさしを十二月従四位下の刑部大輔に
なるおなじき十七年九月十六日方興致仕
しく民部大輔とあらたまりたる之宝暦九年十二
月廿九日卒歳六十四歳義如家つぎまして
對馬守となりたる之侍従すすみて
宝暦二年正月五日三十七歳にて卒去
兼民部大輔義蕃嗣子となりて十二月廿二日
元服つき四月廿六日従四位下の侍従に任じ
對馬守となるおなじき十年御代あ
らたまりてたれにも披露の法に参勤
のおもむきしをたるしに義蕃しころの
病によりて侍りしかの国の侍はしすすみたる
まうしあげしかば十二月四日卒すなほ
そのゆくへまかせて致仕侍のつきてゆるされ

義教の子也母ハ義勝とおなし家つかせらる
義嘉これより武家の大将にはしめたまふ尾方
ハ七才にて安永四年八月十六日五十
九年につとめてしつゝりて義勝家をつきたまひしかれ
九月九日従四位下の侍従し叙爵し將軍
となる宝徳元年の征夷將軍の宣下を
蒙れけれハのちのほとより安永
五年二月四日のにてつく判形しをさゆ

のちそく国用たしかに進退ハ命に
ゆりしなかりしもかしくなき様しかれハ無
術をとこしめし訓かまてゝ年二三れ
ものこゝにさかりのつきよし松そをくたし
家にまきらし黄金壱万二千両をとらせらる時御内に
御内にたまはれハ銀將の比松をとして神将のわき
こゝろりをとて書籍にたてしむかしより銀銭にあまる貴高
を事として国用とこのくさうしゝのこゝろかとの
判形しをすゝみてりをきてし其の政りをけれ
出武国にてさきこえて百にてへすてたよ銭価ハ
に定のころ年二二れ黄金二万両をたかりけり文宝の名をけし
をさめしに寛延三年までの其の人名をうちゑ二とこしまく

おくなりしとともあさましと[illegible]若人々も[illegible]

[illegible]

の利[illegible]

[illegible]

[illegible]

日本七十年の其二年七十五年[illegible]

若子様ニ御[illegible]切三月六日[illegible]

松浦

源隆信

鎮信

源三郎 肥前守 従五位下 寛永十二年十二月晦日叙任 元禄二年七月三日致仕

薙髪称鎮信 同十六年十月六日卒八十二才 法名天祥院慶巌徳祐

女子五人

秋月佐渡守種信室

秋山修理亮正房妻

家人 松浦主膳某妻

同 松浦宇右衛門某妻

松浦覚左衛門信守妻

信　植之助
実ハ松浦縫殿助某養子

女子
秋月長門守種政室

長　国松　源三郎
肥前守　従五位下
元禄二年十二月廿五日叙任
同五年六月九日卒　二十一歳
法名　龍珠院大円宗光

某　源三郎　早世

棟（タカシ）　源三郎
壱岐守　従五位下
万治三年十二月廿八日叙任
正徳二年二月十一日致仕
薙髪號三休入道
同年九月廿二日卒　七十八歳
法名　雄香院俊林宗英

女子
石川美作守乗政室

篤信　数馬
実ハ鎮信四男
肥前守　従五位下
元禄十一年十二月廿五日叙任
享保十二年閏正月二十日致仕
薙髪號篤信
宝暦六年十月三日卒　七十三歳
法名　松英院遠巌俊翁

女子
実ハ秋月式部少輔種封女
加藤和泉守喜矩妻

有信　松千代　源三郎
壱岐守　従五位下
享保九年十二月十八日叙任
同十三年八月十四日卒　十九歳
法名　等覚院天麟英心

女子
牧野越中守貞倶室

誠信　吉松

女子
家人
松浦内匠某妻

某
民之助
早世

女子二人
許嫁豊後守康隆卒松浦
河内守信正為養女嫁朝倉
織部豊良
本多越中守忠如室

某
亀之丞
早世

某
勝十郎
早世

女子二人
家人
松浦民部某妻
松浦左兵衛某妻

致
半蔵
豊後守隆養子

某
傳之助
早世

某
稚之助
早世

雅信 直記
家人 松平権之助某養子

義信 典膳
家人 松平舎人某養子

女子二人
実千本八左衛門倶隆女
松平能登守乗邑室
実松平河内守信正女
松平孫右衛門備妻

信程 金七郎 典次郎
松平河内守信正養子

女子
曲渕市大夫勝延養女

女子 早世

邦 茂七郎 数馬
壱岐守 従五位下
延享三年十二月廿八日叙任
宝暦七年正月四日卒 年三十
六七
法名本貴院華林宗巌

女子
稲葉對馬守那夫室

誠信 吉松 数馬

実篤信二男

肥前守 従五位下

享保十三年十二月廿四日叙任

安永四年二月十三日致仕

同八年閏五月九日卒 年六十九歳

法名誠徳院英山紹俊

某 吉松 早世

政 二ノ三 長三郎 左治馬

壱岐守 従五位下

宝暦七年十二月十八日叙任

明和八年八月十三日卒 二十七

法名政功院蓬山宗立

女子三人

永井若狭守尚備室

木下肥後守利忠室

本多弾正少弼忠籌室

清 英三郎

従五位下 壱岐守

安永三年十二月十八日叙任

某 千蔵 早世

女子

市橋伊豆守長璉室

保 大助 早世

女子二人

一人早世

一人 家人 猪飼直吉妻

敦 太郎吉

女子

武　乙千代

女子

昌　マサシ　織部　大膳
宝永三年十二月七日致仕
隠退入
元文元年正月十日卒
八十六歳
法名万松院俊岳性英

邑　ヲホシ　玄蕃　初郷
宝永五年十月晦日卒
三十九歳
法名松林院柏峰全操

鄰　チカシ　大助　淳正　勝千郎
豊後守従五位下
享保四年十二月十八日叙任
同十二年九月廿四日卒
四十九歳
法名天珠院荊山全光

女子五人
牧野伊予守忠貴室
実家人松浦権大夫信安女
佐竹壱岐守義知室
実秋月佐渡守種信妻
織田讃岐守信朝室
新庄施薬守直賢室
板倉周防守重矢室

某　頼母　早世

女子二人
家人
佐々作右衛門某妻

馮　靫負
元禄十四年九月廿一日卒

某　渡辺隼人　早世

某　渡辺右近　早世

女子　早世

信守　主馬
播磨八兵衛門勝養子

一人早世

篤信 数馬

齋 内膳
家人 播来馬某養子

某 半之丞 早世

某 仕兼 早世

某 豊記 早世

俱隆 八右エ門
十本兵左エ門頼隆養子

致 半蔵 大膳
実肥前守篤信二男
大和守従五位下
享保十九年十二月廿八日叙任
後改致ト正
明和三年十一月廿六日致仕
天明三年八月八日卒 七十八歳
法名宗徽院高雲源致

寶 大膳
大隅守従五位下
明和三年十二月廿九日叙任
後改大和守伊予守
天明三年五月十七日卒 二十五歳
法名云性院雄巌全成

女子二人
大久保遠江守教近室
大炊内膳令應妻 離別
嫁福原内匠資明

矩 タヽシ 龍之助

女子二人

松浦

肥前守源鎮信は壹岐守隆信が嫡子也寛永

六年もし君で人参し（時八歳）初て拝謁す十二年

のちに叙爵し十四年家をつぐ（六万三千石肥前平戸作北…年中の今也）

（照ヒ）寛文四年の夏從四位下松浦肥前守任貞

家紀をわけ川（元子）貞享二年九月御暇の

間の後見しありし壹岐守家世襲にて又孫二十

肥前の州に分し

かくして

そのまゝ致仕し元しかつて継しも事終にて

ひとゝなりてもおほしくは[illegible]也にて世をはやうし給ふ
ゆるされ給ふに讃岐守に嫡子をは讃岐守揀英
蔵人の助川なり　六十二男揀英昌の御ゆるし
めされけり　承応　拾遺　十三〇の御ゆるしの[illegible]
十一月廿八日一揀英は源中納言にて保広二
年の八月おりゐさせ給ひし[illegible]さうしの上
〇年の後五位下の左近衛少将に任し元禄
二年の春正月に四位にならせ給ひけり　又此後実綱とあらはされし

加賀の相守に任す〇十二月廿五日従四位上にのほる
うけたまはる寺社の奉行にかゝる七年の冬
病によりて職をしりそきしに[illegible]の間に復す
宝永六年四月蔵人頭を兼ね遂に参議
の前にあり二條三年二月蔵人[illegible]
卿も世をしれ給ひ嫡子実[illegible]子能登守
長きはしたかひてしも[illegible]従四位下讃岐守
世にありて[illegible]元禄九年の

四月にうまる九歳にして十一年のむかし従五位下
に叙し出羽守に任し正徳三年家をつき
享保十二年正月十二日致仕し宝暦四年十
二月二日七十三歳にして卒すその子孫三
郎有信享保七年十二月十八日はしめて御目見え
え家をつきおなしき九年のふゆ従五位下の
主殿守にうつる十二年家をつきてあたる
十三年の秋廿九歳にしてうせぬその
おなしくしるし十二月対馬守にうつる寛延
三年の二月御かたしとして見えたまはる
して十二月七日家をつきおなしく従五位下肥前守
に叙任し安永四年十二月廿六日致仕し八年
の夏六十九歳にして卒す其子丹波守
邦は世をはやくしかは二男但馬守
まして叙爵して丹波守にあらたむ
も又おくれたちてよとはくにその子其

三郎清政父の嗣となり寛永三年の八月
もり免されて尼崎にいり青山従五位下にして
明る四年の春城従五位下に叙せられて
家をつぐ所領　三河六年の正月十五日叙す
京都にて従四位下廣幸にて従あるに御大膳
源昌政家とよ誌従五二男なり寛文十年
月十四日家を継て元禄元年
八月九日中務の次小姓を免されて

明る二年の様次の通候にて御小姓
讃岐帝従四位下に叙せられ寛永三年の夏従五位下
し元文元年に卒す年八十二歳嫡子と事を色受
元禄二年の春より免されて寄合に宝永三年
九月七日父の家を継て松平出羽守
免されて十九年に卒す其子大助部
十一月廿七日家をつぐ松平七年正月讃岐
守の人に其の所を免されて引退して

つゝけらる正徳五年十二月十五日卒しける
出仕し享保四年の春従五位下若狭守に
叙任し同しき十二年九月大監物として
卒せらる子なかりしかハ家継内膳正か六
男半蔵致定を嗣子として致貞九月廿三日
家継す同しき十九年の春従五位下の大
和守となりける後徳ありて明和三年の夏致
仕して嫡子大膳亮に家督ゆつりて明和
八年八月六十二歳にして卒す致貞明和
二年九月はしめて初て将軍家に拝
従五位下大隅守に叙任し後改大和守下総
三年十一月大番頭となりしか子なき故
継せしむ家継十二月日かのかなし
免さしえこゝに

五島

源盛勝

女子
木津少丈政矩妻

盛暢
主税
初盛尚
飛騨守 従五位下
延宝三年同十二月廿八日叙任
後改佐渡守
元禄四年六月廿五日卒
三十七
法名良薮

盛任
国千代 万吉
主税
初盛寓
大和守 従五位下
宝永六年四月十五日叙任
後改近江守
享保十三年八月十五日致仕
剃髪号和聯
同十九年八月六日卒四十
法名天童

盛道
源吉 傳之助
主税
大和守 従五位下
享保十四年十二月十六日叙任
後改淡路守
明和六年十一月廿五日致仕
剃髪号見外
安永九年四月廿八日卒七十一
法名月山

昌章 小次郎
奥平大膳亮昌能養子

允政 惣八郎 八郎左衛門
昌尚半左衛門正春養子

盛延 弁之 同

重勝 大学 作左衛門
本多飛驒守成重養子

女子
内田若狭守正長室

女子
松平河内守康年室

盛義 主税
依病篭居

女子
実盛義女
伊東播磨守長寛室

女子二人
松平左近康寛妻
伊東伊豆守長詮室

盛運 豊熊 孫次郎 豊之丸
従五位下大和守
明和六年十二月廿八日叙任
後改近江守

某 鳥吉郎 早世

道高 改治

道村 時之助 兵庫
五島右膳盛蔵養子

女子二人
石川靱負道武妻
松平下野守斉道室

大奥

飛騨守源盛勝　初盛高　ハ堀源ら盛勝の娘子

あまり喜多ハ足利しより延宝二年十二月九日

本しよくにつとめ元くかく御側ミ相勤めしき五

年十二月十四日又盛猶ハ出し見とかりしらく

扇につとき　此方ハ松浦郎ミ二ゟ盛勝ハあわ六年二十一日二年二年

享年廿〇て叔麻し　仕源ちかく伊[illegible]と　仕源ちか[illegible]

元禄四年六月廿宇草ハしとてき成をめ子

一志堅三月十二日もれ玄白の養従
五位下の大和守となりたまひ後越享保十二年の
様従仕し長子豆耗盛道小家をつ
く相承して十九年の秋享保廿年かへり
武道享保十年のそれしとて二十たて
まつりて家つきそし相つきて十六年のなく
従五位下大蔵少輔なり紀伊の明和五年
十月従仕宝暦九年四月十一年
事もしく〜とぞ長子主税盛義に廣
よりて家督しりて二男隠岐守盛運
嗣となり明和三年二十八歳にて
入家を継て従五位下の大和守に任
明和七年〇後
近江守にあらため

越智通春

久留島

通用　主馬　歳ア
実服坂淡路守安照二男
宝永元年十月十日卒

通孝　靱負　主殿
初清弥
実松平相模守光仲六男
後帰

女子
永井修理尚品妻

通清　吉松　市兵エ
初通次
信濃守従五位下
寛文元年十二月廿八日叙
元禄十三年九月廿九日卒
年七十二
法名瑞雲院洪岳道乾

通政　万千代　帯刀
初通惣　通厚
伊予守従五位下
宝永六年四月十五日叙任
享保四年十二月二十二日卒
五十九才
法名檜巌院用中通昌

通重　民部
実通清六男
初半右衛門　通迴養子
正徳五年二月四日卒

女子
実半右衛門通迴女
山崎兵庫寛盛妻

光通　靫負　帯刀
初通紘
実修理亮通貞三男
信濃守従五位下
享保五年十二月十八日叙任
明和九年九月九日卒年八十三才
法名泰雄院活水浄温

通貞　半八郎　左兵エ
修理亮
出雲守
享保三年十二月二十日卒八十八才
今ノ當数馬通在祖

通迴　権三郎　斎宮
主税助　宇右衛門
元禄十一年十二月二十二日卒
六十二才

通倫　右近　図書
正徳元年九月廿九日卒

正盛　主水
林権左衛門勝明養子

女子
武田下野守信令妻

高久　靫負
毛利安房守高重養子

道廓
於城州北山鹿苑寺

高定　助十郎
毛利駿河守高久養子

通重 森宮 民部
実通清六男後通政養子

女子
通政養子

通方 主膳
寛文三年十二月四日卒

種春 得能主水
家人
二神傳兵工種親養子

通徳 吉任求馬
家人
土井三郎兵工助足大養子

女子
高木伊勢守守興妻

通重 森宮
宇右衛門通向養子

某 愛次郎 早世

某 市之助 早世

某 帯刀 早世

某 金三郎 早世

通祐 来之助
信濃守従五位下
明和九年閏十二月
八日叙任

通同 次郎 帯刀
実元通七男

通嘉 祥丸

女子二人
東条美濃守一利室
渡辺豊前守信綱室

義俊 左兵エ
山崎兵ア信盛養子

女子四人
高木但馬守緯房妻
青木縫殿助直英妻
家人久留嶌右門通高妻
高井但馬守緯房養女

通同 トモ 福次郎

女子
実家人久留嶌右門通高女
摂津敦賀政斎妻離別
嫁上林六郎久忠離別
嫁佐野与八郎政数

久留嶋

信濃守越智通清 初通次 通清とも 丹波守通春か
嫡男なり母は某の女寛永十二年正
月廿八日はしめて見えたてまつる正保元年
家をつく 豊後の国のうち一万二千五百石 領知し弟[illegible]に
[illegible]小五百石 [illegible] 寛文九年隠居致仕して
元禄十二年九月廿九日七十二歳にて卒
其の子帯刀通政をつかしむ寛文九年の七

月十五日御としく人参りし父の年廿一年の
十二月毎に家作ゆかし寛永六年の春定五
従下の伊織まし一郡了享保四年十二月十六
安九年まいに享保男子郡かはしらに服被ち
閏月次第家安延に三男織部正庵甲も中寺八
しらに廿て子と廿年にかりて御じ松平相
模守源光仲の二男三河守道殿も中寺ゆ
正度中ゆかし一伊勢ほしよりかし

光仲のかうりにゑし廿にて前月武蔵守章
の叙又三位通公て所なされ家督も
ありにして松にまし如何にし
四位庵豆守中寺所
伊豆守も法にても家伝
廿ちに収あり
無に白他年に在世
しらゐ叙父伊庵道貞まゆかの寿
勤光道 補庵 嗣 光
道正治五年の春ゆかし享保
年十月九五日家をつぎ明年の所

御ゆるしを仰渡されし寛文三年
太喜殿となり宝暦八年十二月廿八日叙
出仕御代の始りよりつかまつり明和元年の
九月十八日かくれさせ給ふ享年六十三
子なしあるしの世をさりしかは嫡男の兼
しる通称嗣となり宝暦元年十一月に彩かさね
色をふくみけるに何時拝領明和元年の父に
時服拝領して後御ゆるしの御沙汰有御許

安永四年北七月大君の近く播し病年
のちに御代の務めしこうりて子なるもの
弄通用の嗣子なりける

おゆるしを被仰出候ハゝ寛文三年
大猷院より寛慶八年十二月九日に
お伺ひ之のまりよしつかうを明和元年の
九月十八日かしこまりて幸候しと云年正
みかんあまし世をとかれましハ書男の来
長年御目通り御大猷院申居太守十二月新る
あらしつくの奏ハしをお申出の由に
方にて下る十六年十五日大奏にふ之御座候

国立公文書館
National Archives of Japan